

為遠なる理想

平凡なる実行

題字

衿林照班

追悼
神林照雄



生還



錦江が黄海に注ぐ朝鮮半島の港町・群山は神林照雄の生まれ故郷。



祖父と父が築いた群山の神林薬店前で行われた照雄の壮行会には、神林家ゆかりの多くの人びとが参集した。



休暇を利用して群山に帰郷した薬劑将校・神林照雄。

リヤカー一台の再出発

昭和二十年（一九四五）十二月、南方から復員した神林照雄は、父の親戚を頼って常磐線土浦駅に降り立った。

昭和十七年一月、「必ず生きて帰るんだよ」という母・登美の言葉を胸に、人びとに見送られて朝鮮の港町・群山から応召したのが、遠い昔のことのように思われた。日本の敗戦によって、照雄の生まれ故郷・群山は、もう戻れない国になってしまった。

敗戦は神林家の境遇を激変させた。

土浦出身の祖父松吉と父達三が、明治以来、朝鮮半島で営々として築き上げた神林薬店も、無尽金融会社も、広大な邸宅も、かたちあるものはすべて失ってしまった。

日本人の誰もが飢えていた。だが、料理屋で分けてもらいうなぎの骨や、畑に放置された小さなじゃがいもで飢えをしのご生活は、裕福な生活を享受してきた神林家にとってはつらく、みじめなものだったに違いない。しかし、南方戦線の地獄から生還した照雄には、うなぎの骨や小さなじゃがいもさえ有り難いものと思えた。

土浦で再会した一家の暮らしは、長男である二十四歳の照雄の双肩にかかった。ゆくゆくは、家業の薬店を継ぐつもりで学んだ薬学の知識を生かし、リヤカー一台でクスリの露天商をはじめた。場所は、土浦駅前の目抜き通りにある霞百貨店前の路上だった。

ある日、霞百貨店の入り口に「薬剤師求ム」という貼り紙が出された。神林はさっそく出かけて給料などの条件をたずねた。が、その額で一家の生計を支えることは不可能だった。神林は思いきって薬局を自分に経営させてくれと申し入れた。最初は首を縦に振らなかった百貨店の社長も、神林の熱心に折れた。こうして百貨店の軒先で、店とは名ばかりの「カスミ薬局」が誕生した。昭和二十一年、神林照雄二十五歳の夏のことだった。



クスリを仕分けし、リヤカーでカスミ薬局まで運ぶのが新婚間もないころの二人の日課だった。



照雄と初美の結婚式は、両親と兄弟に見守られた質素だが、温かいものだった。

わずか三坪で土浦一に

クスリは、朝鮮時代から取引のあった大手製薬各社が、開店祝いだといってドサツと届けてくれた。祖父や父が群山で築いた「信用」という無形の財産だけは、人の心にはっきりと生きていたのだ。

ちっぽけなカスミ薬局が人びとの心を捉えたのは、神林の接客態度だった。神林はまず、客の名前を記憶した。二度目の来店時には必ず名前で呼びかけた。後年、カスミグループを率いるようになってからも、臨店の際、新入社員や定時社員を名前で呼びかける神林の特技は、この時代に身につけたものだった。

ものが乏しく、黙っていても高く売れるこの時代に、神林はクスリを二割引で売るといふ大胆な商法を展開した。当然のことながら同業者から抗議の声があがった。しかし、神林は意に介さなかった。お客様に喜ばれることをしているという自信があったからだ。お金の持ち合わせのない人には、クスリをタダで与えさせなかった。

薬剤将校時代の神林には、医薬品がないため、なす術もなく戦友の死を看取った無念な記憶があった。だから、その無念さを晴らすように、病氣やケガで苦しむ人に親身に接した。カスミ薬局は、神林が生涯言い続けた「人のために奉仕する」実践道場でもあった。

薬局経営が軌道に乗り、心にも多少ゆとりができた昭和二十五年（一九五〇）、照雄は妻・初美を迎えた。毎日クスリを積んだりリヤカーを引いて住まいと薬局を往復する夫を、初美は内助で支えた。父の達三が店番をし、高校生になった妹や、まだ小学生だった末弟の章夫が、リュックを担いで仕入れを手伝うこともあった。

開店して十年目の昭和三十一年、売り場面積三坪のカスミ薬局は土浦で一番の売上をあげるまでになった。その経営手腕を認めた霞百貨店の社長は、神林に常務として百貨店の経営に参画することを要請した。三十五歳の神林照雄に大きな転機が訪れた。

創業



神林照雄は、わずか3坪のカスミ薬局から経営者のスタートをきった。

時代の潮流を見抜く感性

神林照雄が霞百貨店の経営陣に加わった昭和三十一年(1956)は神武景気と呼ばれる大好況の年だった。『経済白書』は「もはや戦後ではない」とうたいあげ、戦後の復興を通じた成長は終わり、これからは近代化のための成長期に入ることを示唆した。

当時の小売業の主流はなんといっても百貨店だった。有名百貨店はいずれも長い伝統と格式を誇っていた。それらと比べると、霞百貨店は土浦で唯一のものとはいえ、品揃えや設備も貧弱なものだった。順調な薬局経営から停滞気味の霞百貨店に転じたのは、より大きな仕事に取り組みたいという神林の上昇志向のようにもみえた。

神林はここで小売業の幅広い知識を精力的に吸収した。衣料品の仕入れを担当して商品知識を深めた。経理や、金融機関との折衝法も身につけた。大好きな酒の一升瓶を机の下に忍ばせて、夜遅くまで仕事をする神林の姿は、社内でも有名だった。

アメリカで誕生したチェーンストアの考え方を導入したスーパーマーケットが、日本にも登場しはじめていた。昭和三十三年(一九五八)の秋には、東京資本のスーパーマーケットが土浦に進出した。これまでの対面販売とは異なるセルフサービス方式は、消費者に新鮮な驚きを与えた。

十年間の薬局経営で毎日多くのお客様と接していた神林には、消費者のニーズを嗅ぎとる独特の勘がいつの間にか備わっていた。

戦後の新しい価値観がどんどん広がっている時代に、のれんにしがみついた百貨店が、いつまでも王様でいられるのだろうか。消費者が、よい品を少しでも安く買えることを望んでいることは、カスミ薬局の二割引セールですでに経験済みだった。小売業の主流は、やがてディスカウンターの時代になる。霞百貨店も時代の流れに遅れないため、チェーンストア化を図る必要があることを、神林は、緑



石岡金丸の霞ストア1号店は、お客様に受け入れられ、1周年を迎えた。



霞百貨店の仲間たちとバス旅行。(前列中央)

り返し役員会で提言した。しかし、ほとんどの役員は、時期尚早や投資額があまりにも大きすぎるなどの理由から、動こうとはしなかった。

夢が動きはじめた

神林の提言が受け入れられなかった背景には、数年前の百貨店社屋建て直し工事に伴う前社長と建築業者の金銭スキヤングルの処理をめぐる確執が尾を引いていたと見る向きもある。その詳細は、広く読まれている神林照雄の評伝に譲ってここでは触れないが、経営者は高潔でなければリーダーの資格はないという神林の信念は、自戒をこめて終生変わることはなかった。

神林には、群山の中学時代に出会った座右の銘がある。それは、「高遠なる理想 平凡なる実行」という言葉だった。

この言葉を行動の規範とする神林にとっては、経営者の不正を糾すことも、理想を実現するためのひとつの実行だった。

前社長が百貨店を去ったあと、外部から迎えた新社長は、神林の意見を入れて、昭和三十六年（一九六一）、霞百貨店とは別組織の「霞ストア」を設立、実質的な経営を神林に委ねた。石岡と竜ヶ崎の二店舗だけのささやかなスタートだったが、スーパーマーケットの夢が一步実現した神林は、毎日、霞百貨店とバラックのような霞ストアの本部の間をバイクで駆け回った。

昭和三十七年、母の登美が六十七年の生涯を閉じた。多忙な自分に代わって孝養をつくしてくれた妻に神林は感謝した。

霞百貨店に大手電鉄会社の資本が入ったのを機に、神林は百貨店専務の職を辞した。また、薬局を始めるつもりだった神林の前に、霞ストアの社員が並んだ。「うちへ来てください」。どの顔も、新しい仕事に取り組んでいるという活気に満ちていた。

昭和四十二年、神林照雄四十六歳の新たなチャレンジが始まる。

成長



昭和50年代に入って出店速度は急激に増える。



オールセルフサービスを導入した阿見店は買い物の楽しさをひろげた。



土浦市大町の本部前に勢揃いした霞ストアーの社員たち。(前列右から2人目)

無一物中無尽蔵

昭和四十二年九月、神林照雄は株式会社霞ストアー代表取締役役に就任した。桜川の土手沿い、土浦市大町に立つ本部の建物は「タダでいいよ」という大家の好意に甘えた、十五坪ほどの木造平屋建て。雨風がしのげる程度の社屋に、社員はたった五人しかいなかった。雨が降ると泥濘がひどく、敷地内にあるトイレに行くこともできない。長靴を履いた男子社員が女子社員を背負ってトイレを往復した、という話も残っているほどだ。ストアーは石岡金丸、竜ヶ崎、銚田、土浦の四店舗。それが、今日のカスミグループの出発点だった。

本部集中主義でチェーン展開を図るという理想は掲げられていても、セルフサービスは一部の非生鮮部門に限られ、大半はまだ対面販売である。配送は三人体制。一人が朝六時に本部から商品を積んで四店をまわり十時に戻ってくる。そのころ築地に仕入れに行っていた他の二人が帰ってくる。そこで鮮魚を積みかえ、もう一度配送にまわる。神林は、毎日オートバイで、後には車で、必ず各店を巡り、店舗の従業員一人ひとりに感謝の言葉を伝え、ラベル張り、陳列も手伝った。現場を大切にする神林の姿勢は、当時から一貫して変わることなかった。

翌年、土浦の東中貫に本部センターを移し、商号を(株)カスミストアーと変更する。「真に地域社会に貢献できるスーパーマーケット」という理念の具現化に向け、柱となる幹部要員を採用すべく、自ら求人広告の筆を執ったのも、この頃である。その「リテイリング業界は今後20年以上、絶対に急速に躍進します。」と書かれたチラシからは、当時まだ揺籃期にあった流通業にかける神林の熱い情熱と信念が伝わってくる。

一方で金融機関からの融資だけでは充分でない新規開店資金の調達のため、神林はおよそ考えられない大胆な手を打った。取引先へ



カスミグループの発展を支えた第1回カスミ共栄会設立総会。



土浦市東中貫のサービスセンター前で100店舗、年商1,000億の大目標のもとに集う。(前列左から7人目)

の借金申し込みである。五十万、百万と一軒ずつ借り集めた資金で、神林はオールセルフサービス方式の店舗を開店し、お客様の圧倒的な支持を集める。今日につながるカスミの躍進が始まった。

後年、神林は「無一物中無尽蔵」とよく語った。裸で生まれ裸で死ぬという人間の極限の姿を見てしまった戦争体験から、人間本来無一物、と思いきり、なにもない、あるがままの自分をよるべしとどき、そこに尽きない豊かさがあることを説く。

自らの体を担保として借金を申し込み、誠意を尽くして返済していく中で、神林は無尽蔵の豊かな人間関係を、強い信頼と深い絆を得ていった。今、カスミグループ共栄会を構成する企業の多くは、この時からカスミと苦勞を共にし、喜びを分かち合ってきたのである。

成長のステップを駆け登る

「あの頃、せめて一日に六時間眠ってみたい、と思ったのを覚えていますよ」当時の幹部はそう振り返る。

創業期から成長期へと企業が移行する時、しかし、もつとも働いたのは神林照雄自身だった。夜明け前に起き、ランニングやサイクリングで体調を整え、ラッビーを飲む。神林の終生変わらぬ習慣であった。英会話など、自身の勉強は早朝に済ませ、毎朝六時には出勤していた。週に二回の幹部会議も朝六時から開かれていた。夜も九時前に帰ることはなかった。こよなく酒を愛し、誰と飲み比べをしても負けたことがないほどの酒豪だったが、夜飲み歩くこともなかった。神林のすべての時間、すべてのエネルギーはカスミを育てることに注ぎ込まれていた。月一回あるかないかの休日に、霞ヶ浦で鯉釣りの糸を垂れるのが、ほとんど唯一の息抜きだった。

昭和五十年代前半、カスミは出店を加速し、コンピュータによる受発注のシステム化、業界に先駆けた生鮮加工センターの設立など、流通形態の高度化に果敢に取り組んでいった。

躍進



外食事業に参入した記念すべきろびんふっど1号店。



荒川沖ショッピングプラザ店地鎮祭。



土浦ピアタウン店は新しい時代の店舗スタイルをひらいた。

共栄共存の道を求めて

カスミの出店ベースは昭和四十九年度四店舗、五十年十店舗、五十一年度五店舗、五十二年十店舗と、順調だった。新しい店舗が開店するとき、神林照雄はまるで我が子の誕生を見守るかのよう嬉しうに店舗を見上げ、すみずみまで目を配りながら、店内を歩きまわる。しかしそんなときでも、神林の心には小さな陰りがあった。カスミが出店すると、周辺の小さい商店が経営を圧迫され、撤退していく。人々が幸せであるようにとの願いを込めて新規出店しているのに、これでは逆ではないか。その小さな陰りはカスミが成長すればするほど、神林の心を重くしていった。

そんなとき、ヨーロッパのポランタリーチェーン「スパ」の話を目にした神林は、早速ヨーロッパに飛び、その経営理念、小規模小売業との共存共栄を実現する業態に深く心を動かされた。丁度、大規模小売店舗法によりスーパーの出店が難しくなることが予想されたときである。モノ不足の時代が終わって、モノ余り現象が見え隠れし、日本人のライフスタイルは大きく変わろうとしていた。小売の現場を知り尽くし、常に人々の声に耳を傾け、お客様本位の新業態を模索していた神林の実業家としての直感も「これだ」とささやく。昭和五十二年、茨城県地区スーパー本部を設立した神林は、ポランタリーチェーン事業に乗り出した。

家族を幸福にする食卓を

前後して、外食事業への進出も検討された。当時、海外視察の多かった神林はアメリカでレストランチェーンの成長を目の当たりにしていた。国内でもすでにチェーン方式のファーストフード産業が大きく展開されていたが、神林が外食事業への進出を判断したのは家族を大切に、という考えによるものであった。



カスミつくばセンターは、つくばのランドマークとして風景に溶けこむ。



荒川沖ショッピングプラザ店のオープニングセレモニーには、新社長の神林章夫とともに会長として列席。

神林の脳裏には、幼い頃家族と囲んだ夕餉の光景が浮かぶ。母親の最大の喜びは、おいしいものを食べたときの子供の笑顔である。神林は経験的に知っていた。かたわら、復興から高度経済成長を遂げた日本で、豊かさとは裏腹に家族の絆がバラバラになり始めているのを感じ、何かがおかしい、家族の安らぎや温かさを取り戻さなければならぬと、危機感さえ抱いていた。

日本の家族主義の復権という理想を、和やかに団欒のある食卓に見いだした神林は、

「たどえ手のかかる小さな子供を連れていても、誰もが気軽にける店。家族みんなが満足できるメニューが揃っていて、おいしく、しかも財布の負担にならない店を作ろう」と決意する。

ろびんふっど一号店は昭和五十四年、土浦市真鍋に開店した。その後アメリカのココスと提携し社名をココスジャパンと改めた外食事業部門は、コンビニエンスストアのホットスバーを展開するカスミコンビニエンスネットワークスと共に、今ではカスミグループを支える大きな柱に成長している。人々の幸せを願う神林照雄の大きな人間愛が、新たな事業を起し、成功へと導いていった。

本業のスーパーマーケット事業も急成長を続け、昭和五十一年度のご奉仕高（売上高）二百六十一億円余は、三年後の五十四年度には五百七十六億円余に倍増した。昭和四十九年度に日経流通新聞の全国小売業ランキングで二百番にランクされていたカスミは、昭和五十四年度は五十八番目と、百四十二社を追い越している。そして昭和五十八年度には、念願であったご奉仕高一千億円を突破した。

神林が代表に就任して十五年、思い起こせばバックヤードもなく、店の前の道路から直接手渡しで商品運び込んだ、木造二階建ての石岡金丸一号店開店から二十二年が経っていた。同年カスミは東京証券取引所市場第二部に株式を上場。二年後、一部に指定替えとなった。これは東証の上場記録を塗りかえる快挙であった。

慈愛



女子従業員懇談会で現場の声に耳を傾ける。



慰安旅行で見た珍しい浴衣姿。

奉仕の中にこそ商道がある

総合生活サービス産業を目指し、家電、ホームセンター、書籍、衣料、自動車、住宅と次々に新しい事業を手掛け、ローカルチェーンからリージョナルチェーンへと成長を続ける企業グループの総帥として、神林は多忙を極めた。

しかしどんなときでも神林の脳裏を去らないのは、戦地に赴いた三年間の筆舌に尽くし難い体験であった。マラリアで命を落とす戦友を五人、十人と茶毘に付したこと。炎に包まれた遺体が硬直し、ピクリ、ピクリと動くその光景がありありと浮かぶ。茶毘の臭いがいつも鼻先に漂っているような気さえする。撃沈された船から海に飛び込み、暗い波間を漂流した十三時間余の恐怖と孤独。玉砕を覚悟し、飢餓と戦いながらジャングルを彷徨した日々。

いつどこで死んでもおかしくはなかった。むしろ死ぬことが当たり前だった。それなのに自分は生きている。

いや、生かされている。

現生でどんなに裕福になつたところで、死ぬときは一人だ。

神林の生涯を貫いた「奉仕」の二文字は、極限の戦争体験に裏打ちされている。自分のことより、まず相手のことを考える。人があって自分がある。奉仕させていた。大切に喜ぶことがある。文字通り裸一貫で業の商いを始めたときから、奉仕させていた。大切にすることを神林は自らの基本に据えた。そして従業員にもその精神を説き続けた。

カスミが株式を上場したとき、神林は二百万株を基金として提供し、財源二十五億円の財団法人神林留學生奨学会を設立した。東南アジアの留學生に経済的な支援をするためである。戦争で傷ついたので日本人ばかりではない。むしろアジアの人達の方がよけい苦しかった。そんな思いが神林を突き動かしていた。

日常生活でも経営においても、質素節約をむねとし、自らその範



麻生店リニューアルオープンに来店。神林は活気に満ちた店の雰囲気が好きだった。



私費を投じた神林留学生奨学会は、生まれ故郷の大陸の若者たちへの思いが込められている。

後継者を決める

を示した。多くの社員が神林のポケットから社内に着ていたというクリップや輪ゴムが出てくるのを見ている。それを示しながら、「物には命がある。その命を粗末にしてはいけない」と神林は語る。私は生かされている、モノにも、人にも。折りにふれ、語られるその教えは社員一人ひとりの中に深く染み込んでいった。

カスミグループは、今や大きな社会的責任を担うべき企業集団となった。神林が自ら「最後の仕事」と位置付けていたのが、後継者を決めることであった。しかし、あまりにも急激な成長を遂げたために、個々の役員それぞれは優秀であっても、グローバルな視野でグループの舵取りができる人材が社員の中には見あたらなかった。

公私の区別を厳しく言い、同族経営を嫌い、その理念を掲げて経営にあたってきた神林だったが、知り得る限り次世代のリーダーシップを取れる人材は、十八歳年下の実弟、神林章夫しか思い付かなかった。信州大学経済学部長の職にある章夫は、経営経験こそないが、強いリーダーシップと新しい発想を大学運営に持ち込み、精神的に大学改革を進めていた。その力こそ神林が欲するものであった。しかしどんな理由があろうと、結果としては同族経営の誹りを免れない。深い悔悟に自らを責めながら、周りに相談を持ちかけると、案に相違して「章夫さんがいいじゃないか」という声が多い。神林はあらゆる非難を覚悟し、首を縦に振らない弟を一年がかりで口説き落とす。そしてそれは自らの死期を悟っていたかのように、速やかに実行に移された。神林は社長交代にあたって自らを戒しめた。

「過去に学ぶことは大切だ。それは教訓の宝庫だから。しかし、それを過大視し、もたれかかつてはいけない。新しく出現する状況は過去と類似していても、同じではない。過去に執着しては、新機軸を打ち出すことなどではしない」と。

連環



肉のさばきの手ほどきを受ける。現場に精通した神林は、何ごとにつけても努力の人だった。



カスミつくばセンターの設計者マイケル・グレイブス氏を迎える神林。

万法に生かされている

晩年の神林は、仏教、特に禪の中に自らの理念と合致するものを見だし、深く禪に傾倒していった。平成元年、神林は三億円の私財を投じて出島村に座禅修業の道場「菩提禅堂」を建立し、自らも幾度となく参禅している。

人間は一人で生きていくのではない。万法に生かされている。

夜の海中を漂った後、僚艦に助けられて所望した一杯の水、その水に命を救われたという思いは、年毎に強くなっていった。「お水さま」に生かされた。そう思えば森羅万象、地球に存在するものすべてがいと嬉しい。目に見えるもの、見えぬもの、すべてが人を生かし、お互いを生かし合っている。

神林の思いはDNAというミクロの世界から、大宇宙にまで広がっていった。生かされているからこそ、裏切ってはならない。

奇跡と呼ばれる成長を遂げたカスミグループ。その実際は「お客様のために奉仕させていただく」という神林照雄の心が人の心を揺さぶり、感動が最前線の店舗一店一店の店長を初めとする従業員一人ひとりの心に届き、そしてそれぞれが神林の心を心としてお客様に奉仕させていたことが努力したこと積み重ねが、現実には経営上の数字となって現れているにすぎない。

定時社員として二十年カスミに働く女性は「照雄社長には、言葉では語り切れないほど多くのことを教わった。それをお店でも家庭でも心がけ、子供にもそのように教えてきた」と語る。

カスミグループで働くことは、時間を提供し、給料を受け取るという無機質な関係ではない。自らを振り返り、個々の持てる力を最大限発揮して、しかも積み重ねを怠らないことの大切さを、日々、身をもって実践することであり、生かされている自分を知り、その感謝の心を行動で表すことである。



仏教は神林の思想と行動の根本義だった。

神林は自らの理念を一人ひとりの社員に伝えるため、病に伏す直前まで、年に二度の臨店を欠かさなかった。従業員入口から、あるいはバックヤードから、作業着で、時には長靴、白衣姿でにこやかに入ってくる神林の姿を、従業員は忘れない。合掌し、一人ひとりの手を握り締めて、「ご苦労さまです」と声をかける。その手の柔らかく大きく、包み込むような温もりを、かけられた声の優しさを、誰もが胸に刻んでいる。

受け継がれる心

激動の昭和を駆け抜けるように、激動の人生を生きた神林照雄。「こんなに大きな会社になるとは夢にも思っていなかった」と、誰もが来し方を振り返り、照雄と歩んだ人生を幸福に思い返す。それは、とりもなおさず神林が人間の善を信じ、出会う人一人ひとりの中にそれを発見し、育て、それぞれが良い人生を歩むことを励まし続けたことに他ならない。

カスミグループで照雄の薫陶を受けた社員は「その教えを日々の中でどれだけ『平凡なる実行』となせるか、どれだけ後輩に伝えていけるか、それがお返してできる言葉だと思う」と語った。まさにその言葉の中に、自らが範を示した生き方が脈々と伝わっている。

その近著で神林照雄は自身の死をこのように語っている。「私はすでに七十三歳です。個体としての死を迎えるのは、さほど遠いことではありません。私という個体は次世代の数多くの個体と交代するのです」

経営を通じ、生涯をかけて伝え続けた照雄の心は、その個体の死を越え、次世代の多くの人々に受け継がれて行く。神林照雄はそう信じ、従容として黄泉の国に旅立った。

亡くなる数日前、最後に見舞ったある幹部に、神林は「一円でも大事にしてください」と声をかけたという。



朝鮮・群山の神林家。日本の敗戦で邸宅も店もすべて失った。



神林照雄の誕生がやがてカスミグループの誕生につながる。

年譜

大正10(1921)年

昭和2(1927)年

昭和8(1933)年

昭和9(1934)年

昭和14(1939)年

昭和16(1941)年

昭和17(1942)年

昭和18(1943)年

昭和19(1944)年

昭和20(1945)年

昭和21(1946)年

昭和25(1950)年

昭和31(1956)年

昭和36(1961)年

昭和37(1962)年

昭和42(1967)年

昭和43(1968)年

3月10日、当時の朝鮮、群山に父達三、母登美の長男として生まれる。

群山尋常高等小学校に入学。

群山中学校に進む。

配属将校只友孟少佐より、生涯の座右の銘となる言葉「高遠なる理想、平凡なる実行」を教わり、深い感銘を受ける。

京都薬学専門学校(現京都薬科大学)進学、マンドリンに熱中する。末弟章夫誕生。

12月8日米開戦、同月京都薬学専門学校繰り上げ卒業。徴兵検査を受け、第二乙種で合格。暮れ、群山に帰郷。

徴兵、2月1日付けで陸軍十四師団(宇都宮師団)入隊。二等兵として上官よりしごきを受け、肉体的・精神的に苦む。

5月衛生部幹部候補生試験を受け合格。東京・若松町の陸軍軍医学校で研修を受け、11月より宇都宮の戸祭陸軍病院に勤務。

12月9日宇都宮第五十一師団所属衛生隊の一員として、南方へ向け宇品港より出航。

元旦、ニューブリテン島ラバウルに到着。マリアアが蔓延し自身も罹患。戦友を次々に葬る。戦況激しく、衛生部隊バラオ諸島コロール島に後退。

5月、ニューギニア島ホーランジャに転進命令。転進途中に輸送艦が撃沈され、13時間余り漂流。奇跡的に救助される。

同乗の将兵約1000人中、助かったのは10名余であった。バラオ諸島アンガウル島に配属され、その後コロール島に転進。

9月マリアア再発のためペリユール島勤務命令受令でさき。数日後ペリユール島日本軍は、全員玉碎。コロール島日本軍も飢餓に苦しみ、神林も玉碎を覚悟する。

9月、コロール島で敗戦を知る。12月14日浦賀に復員。24日本籍地の土浦に戻り、引き揚げてきた家族と再会。市内川口町の染谷旅館に一部屋を借り、一家7人で住む。

7月5日、霞百貨店の一階を間借りし、薬局を開店。妻初美を娶る。

霞百貨店に常務として入社。

株式会社霞ストア設立。実質的な責任者となる。

母登美永眠。

8月、霞百貨店を退職。父達三永眠。9月、霞ストア1社長に就任。下妻店を出店し、店舗数5店となる。

商号を株式会社カスミストアに変更。東中實に本部センター



群山中学卒業記念。初めてのビールを飲んだ仲間のうち9人は戦死した。



神林照雄の温顔はいつまでも私たちの心に残る。



生涯陣頭指揮をとった神林にはジャンパー姿がよく似合った。



多忙な中を旅に出かけた照雄・初美の数少ないツーショット。

昭和46(1971)年	昭和48(1973)年	昭和49(1974)年	昭和51(1976)年	昭和52(1977)年	昭和53(1978)年	昭和55(1980)年	昭和57(1982)年	昭和58(1983)年	昭和59(1984)年	平成元(1989)年	平成2(1990)年	平成3(1991)年	平成4(1992)年	平成5(1993)年	平成6(1994)年	平成7(1995)年
完成。店舗数は6店。 取引先に借金し、オールセルフサービスの阿見店を出店。 5月、群山中学校開校50周年式典に参加するため、31年ぶりに韓国を訪問。日本人の道徳心の低下を嘆く。6月、西ヨーロッパ小売業の研修視察旅行。以降海外視察頻繁となり、この頃より英会話の勉強を始める。	コンビニエーターを導入し、受注発注のシステム化を図る。 生鮮加工センター完成、食肉の集中加工を開始。店舗数30店。 茨城県地区スパー本部(現・カスミコンビニエンスネットワークス)を設立、ポラントリーチエーン事業を開始。 (株)ろびんふつどを設立し、外食事業に乗り出す。	6月、熱海金城館でカスミ共栄会発足総会開かれる。中央物流センター完成。グループ総店舗数148店 東京証券取引所市場第2部に株式上場。 カスミの売上高、念願の1000億円を越える。	東京証券取引所市場第一部銘柄に指定替え。株式200万株を財源として、財団法人神林留學生奨学会を設立、東南アジアからの留學生の支援を始める。 多角化に伴い、商号を株式会社カスミに変更。 この頃より後継者問題を真剣に考え始める。 ろびんふつど、(株)ココスジャパンに社名変更。	私財3億円を投じ、出島村岩坪の3000坪の敷地に霞ヶ浦菩提禅堂を建立する。台湾カスミ1号店、韓国ココス1号店オープンし、海外にネットワークを広げる。 カスミトレーニングスクール開設。神林章夫、カスミ代表取締役副社長に就任。グループ総店舗数675店。 関東地域スパー本部が(株)カスミコンビニエンスネットワークスに社名変更。グループ総店舗数734店。 (株)トレーダムジャパン設立。カスミ代表取締役会長に就任。神林章夫、カスミ代表取締役社長に就任。	カスミグループ総合研修センター、カスミつくばセンター完成。(株)日本ネバダ・ボブズ設立。カスミスポートワールドリンク設立。グループ総店舗数954店。 (株)カスミプライム21設立。(株)ココスジャパン株式を店頭公開。グループ総店舗数1030店となる。	(株)カスミハウジング設立。グループ総店舗数1207店。 6月22日6時22分永眠。戒名 霞光院眞嶽照雄居士位										



カスミ再発見のよすがとして

神林照雄が逝って早くもひと月近い時間が過ぎようとしています。私にとって神林照雄は、経営の優れた先達であると同時に、血を分けた兄でもありました。それだけに、言いようのない寂寞の思いをかみしめながら日を重ねております。

十八歳という年齢差のため、兄と一つ家に過ごした時期は短いものでしたが、離れて暮らしていても、カスミグループの成長ぶりを見聞きするにつけ、わがことのように嬉しく思っておりました。

図らずも、ともに経営の座に着くことになってから、神林照雄は、経営者のあるべき姿や人としての生き方を、公私の別を峻別しながら薫陶してくれました。

企業は時代とともに変化します。しかし、私たちカスミグループには、変えてはならないものがあります。それは、人と物とお金を大切にすることです。この平凡なことを実行することこそ、会長が生涯をかけて追求した「商道」という高遠な理想に近づく道であり、会長の遺志に副うものであると考えます。

神林照雄の生涯は、数知れぬ多くの方々に支えられた一生でした。お客様はもちろんのこと、お取引先の皆様、そして、カスミグループの従業員一人ひとりのご協力によって全うできた幸福な生涯であったと思います。故人に代わって厚く御礼申し上げます。

会長亡きいま、私はグループの中軸としてカスミグループの更なる発展に邁進する決意を新たにいたしておりますので、変わらぬご支援を頂きますようお願い申し上げます。

この冊子が神林照雄を偲ぶよすがとなり、また、私たちのカスミを再発見していただくきっかけとなれば幸いです。

平成七年七月十七日

神林章夫

